

## English Garden 第44話

"And indeed there will be time To wonder, 'Do I dare?' and, 'Do I dare?'"

T.S. Eliot

「たしかにまだこう考える時間はあるだろう『思い切ってやるか?』『思い切ってやってみるか?』と」

T.S.エリオット

今回はT.S.エリオットの処女詩集"Prufrock and Other Observations"（「ブルーフロックとその他の観察」）に収められた最初の詩"The Love Song of J.Alfred Prufrock"（J.アルフレッド・ブルーフロック氏の恋歌）からです。これはエリオットがまだ22歳、ハーバード大学院在学中の1910年の作品です。従来の英詩の伝統的な恋歌とはまったく異なったこの詩は、後に英詩の転換点になった作品と評価されるようになりました。



詩の冒頭には「荒地」と同じように序詞があり、ダンテの「神曲」の地獄篇からの一節がイタリア語のまま引用されています。内容は「あなたは再び生きて地上に戻ることはないのだから、あなたに話しても私は恥をかくことはあるまい」というもので、主人公の気持ちをそのまま説明しています。なお、「Prufrock」とは "prudence in frock"、すなわち「フロックコートを着た慎重居士」のような意味であるとされています。

次にこの詩のユニークな出だしの部分を紹介しましょう。

Let us go then, you and I,  
When the evening is spread out against the sky  
Like a patient etherised upon a table;  
では出かけよう 君もぼくも  
麻酔をかけられた手術台の患者のように  
夕暮れが空一面にひろがる頃  
(大澤 実訳)

夕闇の広がるさまが、麻酔をかけられて手術台に横たわる患者のようだというショッキングな比喻によって語られていきます。夕闇が昼と夜との境目であるように、麻酔をかけられた患者は生と死、意識と無意識との中間をさまよっています。これはそのまま主人公のブルーフロックの意識にもつながっていて、彼の単調な日々の生活では、「意識はあっても何も意識していない」ことを暗示します。

語り手であるブルーフロックは、誰かと連れ立っていきまから誰かを訪問しようとしています。そして、安宿や「おがくずやカキ殻の散らばった」飲み屋の並ぶ人影もまばらな街を歩きながら、「思い切ってやろうか、どうしようか」と考えています。彼は頭の真ん中が禿げた中年の男性で、相手の女性に恋を打ち明けたいのですが、嘲笑されるのが怖くてなかなか決心がつきません。そこで「まだ時間はある、時間はある」といって決断を延ばしているのです。これは「今日できることを明日にのばすな」という類の常識的な諺の裏返しでもあります。表題の言葉のすぐ前には、「これから会う人たちに合わせる顔をつくらう時間、殺したり創造したりする時間、毎日の手作業をして、君のお皿の上で疑問をつまみ上げたり落としたりする時間、なお決まらない百の不決断、百の想像と修正のための時間」があるだろうなどと、さまざまな事柄が並べられていますが、では一体、主人公がやろうとしているのは何かというと、何と「トーストを食べ、お茶を飲む」ことなのです。これがどのように発展するか、続きは次回に。